

「人格の内なる人間性」についてのカントの思想形成 ——「個人」の道徳から「社会」の道徳へ——

船木祝

札幌医科大学医療人育成センター 教養教育研究部門哲学・倫理学教室

Shuku Funaki

Philosophy and Ethics Division, Medical Education Center, Sapporo Medical University

カントは、長い思索過程の中紆余曲折を経て、ようやく独自の人間性の概念を形成していった。1770年代半ば頃のカントは、人間性のうちにある悪性が人間の活動欲を鼓舞し、そのことによってかえって個人の才能が開花され、技術や学問の発展がもたらされると考えていた。そして、礼儀正しさや名誉といった外面的道徳的強制の基、文明化を推し進めていけばいずれ完全な市民的社会体制が実現するものと考えていた。しかし、1780年代のカントは、文明化が推し進められると、各人の自由に歯止めを利かすことができなくなり、新たな害悪を拡大することになると主張する。したがって、単なる文明化は市民社会を瓦解させると考えるようになる。そこからカントは、外面的道徳的強制ではなく、人間性のうちなる道徳性が文明化の条件として上位に位置づけられなくてはならないとの洞察に至る。そこには、個人の視点から社会全体の視点に立った、カントの深化した思索が認められるのである。

キーワード：人間性 市民社会 文明化 道徳化 尊厳

1 はじめに

『人倫の形而上学の基礎づけ (*Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*)』(1785年)においてカントは、「汝の人格の内なる人間性 (*Menschheit*) を、そしてまた他のあらゆる人格の内なる人間性を常に同時に目的として扱い、決して単なる手段として扱わないように行為せよ」(IV 429) という、いわゆる定言命法の第二方式を提示する。そして、「手段」としての「物件」に対して、個々の「人格」は「目的自体として存在する」と言われる (IV 428 f.)。すなわち、個々の「人格」が「目的自体」として用いられなくてはならないのは、その内にある「人間性」のためであるということが分かる。カントはまた、「道徳性と、道徳的でありうる限りでの人間性が、唯一尊厳をもちうるものである」(IV 435) とも述べ、「約束における忠実さ、原則に基づく好意」は「内的価値、すなわち尊厳」をもちうるのに対して、「熟練、勤勉……、機知、生き生きとした想像力、諧謔」などは「価格」をもちうるにすぎないとする (ebd.)。そして前者の価値は、「そこから生じる結果や、それがもたらす利益や効用にあるのではなく、心術……の内にある」とされる (ebd.)。

したがって、「目的自体」である「人格」についてのカントの思想を支えているものは、「道徳的でありうる限りでの人間性」であると言える。

カントは、「道徳性」が「人間性」を「目的自体」たらしめる根拠でなくてはならないというこの思想に、試行錯誤を経て到達したのであって、それを自明のものとして表明しているわけではない。カントが「人間性」概念を扱ったのは、特に、1772/73年の冬学期以降、1795/96年の冬学期に至るまで担当した人間学講義においてである。つまり、カントの「人間性」についての思想は、人間学、もしくは経験的心理学における洞察に裏づけられたものなのである。

1780年以降のものと思われる『人間知 (*Menschenkunde*)』と題された人間学講義においては、「開化 [文化] (*Cultur*) は元来ただ人格にだけ関わり、文明化 (*Civilisirung*) は社会に、そして道徳化 (*Moralisirung*) は最善なる普遍的世界に関わる」と述べられている (XXV 1198)。この言葉から、カントは人間を、まずは個々の「人格」存在として、次に「社会」内存在として、そして最後に「世界」に向かう存在者として考えていることが窺われる。したがって、カントは「人間存在」を、三つの要素の統合

と考えていることが分かる。カントはこの三つの位相における人間存在のあり方を、それぞれ単独に考察したのではなく、諸要素間の関連性の中で明らかにしようとしたのである。それゆえ、「人間性」の本質的目的である「道徳性」に関しても、「人間存在」を成り立たせる他の諸側面との関係性の中でその思索を深めていったのである。

カントの思想は、その公刊著作物だけではなく、講義録から研究されなくてはならないことは、これまでカント研究者のあいだで強調されてきた。特に、1771年から1780年までのいわゆる「沈黙の10年」の思想研究はカントの思想発展の理解のために重要である¹。ノルベルト・ヒンスケによれば、こうした分析が、カントとドイツ啓蒙思想家との関係、並びに『『純粋理性批判』の内在的生成発展』の理解を得るためには不可欠である²。しかし、講義録研究には、筆記をした若い学生たちの「理解力の問題」、また「年代設定の問題」などのために多くの課題を残している³。これらの問題に対しては、1986年以降ヒンスケにより公刊されているところの『ドイツ啓蒙の研究と資料 (*Forschungen und Materialien zu deutschen Aufklärung*)』のおかげで、カント研究者は論理学講義と道徳哲学講義に関して参考資料を手にすることができるようになった。しかし、アカデミー版第25巻の人間学講義録におけるカントの思想発展に関する研究は、まだ端緒についたばかりである⁴。本稿は、特に人間学講義及び道徳哲学講義における「人間性」についてのカントの思想発展を辿っていくことにより、カントが長年に亙る思想形成過程の中で、「人間存在」を成立させる諸要素間の区別立て、及び関係づけにいかに取り組んできたのかを明らかにすることを目指す。

2 1770年代の人間学講義における「人間性」の概念 ——「人間性の目的」とは何か——

1772年から73年にかけての冬学期のものとして推測される『パロウ人間学 (*Anthropologie Parow*)』では、まだ「人間性」全体に関わる性格づけの叙述が見られない。個々の「人間 (Mensch)」の性格づけという観点から考察がなされている。その際注目すべきことは、カントは個々人の性格をその人の有する「目的」から特徴づけようとしていることである。「それゆえ人間の性格を規定しうるためには、彼の本性の中にあてがわれている目的を知らなくてはならない」(XXV 438)。しかし、たとえば「名誉」とか「慈善を施すこと」などといった、個々人の有している諸目的を挙げることによって、人間の「性格を定めることは困難である」と言われる (ebd.)。そこでカントによれば、「人間の性格」を定めるためには、人の有する「主要目的

(Hauptzwecke)」を見出さなくてはならないのであり、そして、結局のところ何を求めているのかという「究極目的 (Endzweck)」(ebd.)まで突き止めなくてはならないことになる。以上のような、「目的」という観点から「人間の性格」を特徴づける試みは、時を追うごとに、「人間性」、すなわち「人類」全体の性格づけについてのカントの叙述にも引き継がれていくのである。

1770年代半ば頃のものとして推測できる『フリーレンダー人間学 (*Anthropologie Friedländer 3.3 [Ms. 400]*)』では、「人間性一般の性格」と題された章が見られる。すなわち、カントは特にこの時期以降、個々人の性格づけだけでなく、「動物の中で、そしてあらゆる存在者の中で、いったいそれ [= 人間性] はいかなる性格を有するものなのか」という問題に取り組んでいることが分かる (XXV 675)。したがって、「人間性」についての問いは、地上における他の生物との比較において人間が類としていかなる性格を有するののかという問題に関わるのである⁵。

その際カントは以下のように、人間の本性にはいったい何が与えられているのか、次にそれは何のためであるのかという「目的」の観点から、「人間性」一般の性格についての考察を進める。まずカントは、人間の本性には「悪性 (Bösartigkeit)」が宿っていること、そしてそのことから人間が、同じ種である他の人間に対して「不信感をもち、残忍であり、敵意をもつ」動物であることを出発点とする (XXV 678 f.)。人間にこうした本性が与えられた「目的」として主に二つが挙げられる。一つ目は、人間が「地球全体に住む」ようになれるためである。「もし人間が他者と折り合いがよかったとすれば、人間は[拡がっていかずに]皆一団となって暮らしていたであろう」が、そうはならずに「互いに協調できず」、対立し合うことによって、かえって人間は「地上全体に分布する」ようになった (XXV 679 u. 691)。二つ目に、「文明化された社会体制」を築くことを可能にするために、「人間の本性の悪性」がある。すなわち、「もし人間が本性上柔和で善良であったとすれば」、安全の確保のために何も「市民的社会体制」を作らなくても、安らかに暮らしていくことができただであろう。しかし、実際には人間には互いに不信や敵意をもつような悪性が備わっている。それは、個人の行為を統制すべき「市民的社会体制」を築くためなのである (XXV 680 f.)。同時に、その社会において、「経済的に不自由にならないこと、礼儀正しさ (Anständigkeit)、名誉」などといった様々な強制を受けることによって、人間は「活動」へと鼓舞されて、「勤勉で労働意欲のある」者になったとも言われる (XXV 690)。

「人格の内なる人間性」についてのカントの思想形成

続いてカントは、こうした他者との敵対によって鼓舞された活動欲を通じて、人間はどのような「積極的善」を生み出したのかという問いに関して考察を進める (ebd.)。その際、人間存在を成り立たせる諸側面に即して論述がなされる。第一に、「人間は才能を開発し」、「技術や学問」を生み出した (XXV 690 u. 692)。これは個人の「文化」に関わることである。第二に、洗練された「礼儀正しさ」を身につけた (XXV 680 u. 692)。これは社会の「文明化」に関わることである。そして第三に、市民的社会体制において、「あらゆる人は他者の道徳的判断を恐れ」たり、名誉を、すなわち人に誠実な人物と思われることを求めることによって、その人倫的態度を形成していくということである (XXV 692 f.)。市民社会内での、他者との関係におけるこの強制力を、カントは「外面的」「道徳的強制」(ebd.)と呼んでいる。たとえば、「道徳性……反して振舞う人とは交際しようとは思わない」という気持ちを多くの人をもつようになれば、そうした社会的圧力の中に生きる人々は、自らの「道徳的性格」にも注意するようになるだろう (XXV 693)。

以上の叙述から、カントは、人間の本性の中にある悪性がむしろ市民的社会体制の形成を促し、さらにその体制の中で人間は様々な善きものを築いていくことができると考えていることが分かる。このように1770年代半ばの頃のカントは、「人間性」における「文明化」の側面を特に強調している。カントは、「文明化」をこのまま押し進めていけば、「完全な市民状態」における最高の幸福を、たしかに「個人」においてではないが、「社会全体」としてはいずれ実現可能であると考えていたのではないかと思われる (XXV 690)

3 人間学のレフレクシオン ——同時代人における思想上の源泉——

以上述べてきたようなカントの思想の諸源泉の一つとして、いったい同時代におけるどのような思想家が考えられるであろうか。以下、人間学講義の自筆メモを記したレフレクシオンを分析することにより、カントの思想背景を提示したい。

『レフレクシオン』1391番 (laut Adickes 1772-1775) において、人間における「悪」が「人間の結合」、「才能の開発」に役立っているという記述が見られる。「人間の精神力には限度があるので、人間の結合が、また才能の開発へと仕向ける強制が必然的なものとなるためには、媒介的原因として悪が……役立たなければならない」(XV 605)。この『レフレクシオン』は、アレクサンダー・ゴットリーブ・バウムガルテンの『形而上学』(1739年)の298頁に向けられている。「人間の魂の本性」と題された章における同頁749節におい

て、それぞれの「人間の魂」が「完全に等しい」ことは不可能であり、それゆえに各人の「感性、想像、予見、判断、趣味、快・不快、感性的動機、動因、……欲求、嫌悪、意欲」が完全には一致することはありえないとバウムガルテンは述べている⁶。この記述から、バウムガルテンはもともとあるそれぞれの人間の本性上の相違から、人間同士の不和、争いが不可避であることを認めていることが分かる。また、バウムガルテンの『哲学的倫理学』(1740年)では、人間の天性は「開化」と「修練」を通じて改善されることができるということ、したがって「粗雑な人物」から「淘汰された人物」への育成が可能であることが主張されている⁷。カントはこうしたバウムガルテンの思想を基に、人間の本性上の不一致から様々な争い、不和が生じるのであるが、それがむしろ人間の市民的結合への、また各人の才能の開化への活動源となることを主張したのだと思われる。すなわち、カントのこのような主張は、経験的心理学におけるバウムガルテンの人間の本性についての考え方と取り組む中で導き出されたことなのである。

また、『哲学的倫理学』においてバウムガルテンは、「学識者の認識は無学の者の認識よりも一層、[心的状態において]熱したものにさらなくてはならないがゆえに、……それは悪へと駆り立てる」ものであると指摘する。そのような学識に起因する悪としてバウムガルテンが挙げているものには、「偽善、不機嫌な態度、杓子定規、文字通りの高慢」、「敵意、恥知らずの争い、嫉妬、忘恩、悪意、冷酷」などがある。それゆえ、バウムガルテンは「学識者のほうが他の者よりも徳へと義務づけられる」と述べる⁸。カントも『レフレクシオン』1394番 (1772-1775) において、文明化された社会の中で「うわべを装うこと、……妬み、優位に立とうとする精神、密かな敵意」などが助長されることを指摘しており、こうした傾向を抑えるためには「道徳的強制」が必要であるとしている (XV 608)。さらに、『レフレクシオン』1393番 (1772-1775) においてカントは、「名誉、交際、職務」を獲得するための「誠実さ」や「善い心術」への「道徳的強制」について言及している。

これらのレフレクシオンと上述の1770年代半ばのものと同様に見られる人間学講義における叙述を合わせて考察してみるならば、カントは、市民社会での悪徳による弊害を抑えるためにバウムガルテンが必要であると主張したところの「徳」への強制を、「外面的な道徳的強制」としてそれに補完的役割を認め、その強制力の中で、いずれ人間は文明化を通じて幸福な状態を獲得しうるものと考えていたということが分かる (vgl. *Anthropologie Ms. 400* XXV 693)。

4 1780年代における「人間性」の概念 ——上位理念としての「道徳化」——

次に、1780年代におけるカントが、「人間性」の概念において、「文明化」から「道徳化」に次第に力点の置き場を変えていったということを提示したい。

1780年代半ば頃のものとして推測される『ムロンゴヴィウス人間学 (Anthropologie Mrongovius)』では、「人間の性格 (Character der MenschenGattung)」と題された章が設けられている (XXV 1415)。そこにおいてカントは、「人間を動物に対置し、両者を比較する」ことによって、人類の特性を見出そうとする (ebd.)。当講義録ではまず、「非社交性の原理 (Prinzip zur Ungeselligkeit)」という用語を用いてではあるが、1770年代半ば頃の人間学講義におけるのと同じように、この原理によって人類は、「活動性へと刺激」されて、地上全体に分布するようになったと叙述されている (XXV 1416 f. u. 1421)。そして、こうした「非社交性」が、「怠惰に満ちた」「牧歌的な牧羊生活」ではなく、「市民的結合」を生み出したのだとカントは指摘する (XXV 1422)。もし敵対関係を生じさせる「非社交性」がなければ、「人間は完全化・開化されることもなく、[人間における]何ものも他のすべての動物種以上に高く評価されるものとは決してないなかったであろう」とカントは述べる (ebd.)。一方人間は、「個体 (Individium)」としては完全な状態には達することができないのであって、「世代から世代へと」完全性の度合いを高めていくべき存在であるとされる (XXV 1417)。たとえば、「文化」に関して見るならば、「60歳代に達し」、「自ら獲得した文化を最も活用できる」と思われる頃にはもう、人は徐々に「鈍ってきたり無気力になってきたりして、他の人に席を明け渡さなくてはならない」ことになるとカントは述べる (XXV 1419)⁹。

以上のように、カントは、「市民社会」を通じて「文化が生み出され」、人間は次第に「人類」の「最終的使命」(XXV 1425) に近づいていくべき存在であるとする、1770年代半ば頃と同様の見解を示す。しかしその反面において、1780年代の当講義録では、「文化の程度」が高くなるにつれて、かえって「市民的社会体制」が瓦解するという側面をカントは指摘する (XXV 1426)。すなわち、「文化」が高度になると、「贅沢から多様な欲求が高まり、[他者の]自由を制限しようとする動きが強まる」、そして、「自由に慣れた人々は[もはや]、彼ら[自身]の自由を制限させようとはしなくなる」とする (ebd.)¹⁰。人間学の『レフレクシオン』1460番 (1783-1784) においてカントは、「道徳性なしに所有しうるような最高度の文化をわれわれは有

しており、文明化もその最大限に達している」と述べた後に、「……文明化は、道徳性を全く消滅させている」と指摘する (XV 641)。したがって、1780年代におけるカントは、その本性における悪性が活動欲を生み出すことによって市民社会が形成され、その中で文化・法・道徳における様々な善きものを生み出していくものとしての人類の側面よりも、むしろこうした進展が様々な欲求を高めることによって、かえって人類はお互いの自由を制限し合うことになるという否定的事態を前面に押し出して論じていることが分かる。注目すべきことは、カントはこうした思想を、市民社会が進歩すれば各人の自由への要求に歯止めが利かなくなるという、人間の本性についての人間学的考察から導き出しているということである。カントは、人類が「道徳性」を欠いたまま「文明化」において進歩を続けても、それだけではその目指すところの幸福な社会を実現できないことを指摘していると言える。こうした洞察に基づいてこの時期以降、カントは、「徳を欠く礼儀作法、誠実さと友情を欠く[外面的]社交性」は文明化だけをもたらすものであるとし、それに対し、人類の「[内面的な]道徳性」に関わる「道徳化」の必要性を特に強調するようになった (XXV 1425 ff.)¹¹。

当講義録においてさらに注目すべきカントの叙述は、次のように、人間を他の動物種と区別するものとされる「言語」(XXV 1417) に関して見られる。すなわち、「市民社会が完全であればあるほど、人間はますます裏表のある (falsch) ものとなる」。なぜなら、人間は「あまりに正直であると物笑いの種になる (verächtlich)」と考え、さらに「控え目 (Zurückhaltung) にうわべを装うこと (Verstellung)」によって「他者に対して優位に立とうとする」からだとしてカントは言う (XXV 1421)。そして「道徳的に善なる性格」に基づいてのみ、人は「正直」になれるものだとされる (ebd.)¹²。カントのこうした叙述から見ても、カントは1780年代半ば頃には、人類と他の動物種との区別に関する論述において、「文明化」の進展において完全性へ向かうべきものとしての人類の位置づけを後退させる一方で、「道徳性」の開化を人類の特性として前面に押し出そうとしていることが認められる。

『世界市民的見地における一般史の理念 (Idee zu einer allgemeinen Geschichte in weltbürgerlicher Absicht)』(1784年、『一般史の理念』と略記) において、まず1770年代半ば以降の人間学講義に見られた思想が「敵対関係 (Antagonism)」という用語を用いて叙述されている。すなわち、人間の本性の内に「敵対関係」、つまり「非社会的社交性」があることから、人類は、「怠惰の性癖を克服し、また名誉欲や支配欲、あるいは所

「人格の内なる人間性」についてのカントの思想形成

有欲に駆られて」、あらゆる才能を次第に開発することができ、また礼儀正しさを身につけることによって、共同体生活を快適に暮らせるように押し進めてくることができたのである (VIII 20 f.)¹³。しかしその一方で、『人類史の憶測的起源 (*Mutmaßlicher Anfang der Menschengeschichte*)』(1786年)においては、時が経つにつれて「贅沢」が「都市の住民のあいだに現われ始め」、*「魂の抜けた溢れるばかりの豊かさが、未開状態のありとあらゆる悪徳と交じり合っ*て」しまい、「人類」は「善の素質を形成するための……進路から逸脱」して、「地上において支配するように……定められた類としては[もはや]値しないものに」なると述べられている (VIII 120)。そして『一般史の理念』においては、「名誉心や外面的礼儀に見られる道徳めいたものを旨とするならば、やはり単なる文明化に終わるであろう」とされ、これに対して「市民の考え方の内面的陶冶」、すなわち「道徳的に善である心術」の陶冶のための、「*「各々の共同体の長期に亙る内面的矯正」*の必要性が説かれている (VIII 26)。

1780年代の刊行物における以上のカントの叙述を見ても、人類が「道徳めいた」ものの下にそのまま文明化を押し進めても、社会に「悪徳」が蔓延するとし、長期的視野に立って共同体を真に「道徳化」することが不可欠のものであると、主張されていることが分かる。

5 道徳哲学講義における「人間性」の概念 —「人間性」の有する二つの側面：「脆弱性」と「尊厳」—

最後に、道徳哲学講義の考察を通じて、カントがすでにほぼ1770年代半ば頃には「人間性の尊厳」の思想を提唱していたことを、さらに、ではいったい1780年代におけるカントの思想上の発展はどのような点に認められなくてはならないのか、という点を明らかにしたい。

1772年から73年にかけての冬学期以降、人間学講義は水曜と土曜日に、道徳哲学講義の方は月、火、木、金曜日に行われた。道徳哲学講義録の内、『コリンズ道徳哲学 (*Moralphilosophie Collins*)』はほぼ1774年から1777年までのいずれかの冬学期のものとして見られているが、『ポヴァルスキー実践哲学 (*Praktische Philosophie Powalski*)』の方はまだ難題を残しながら、ほぼ『コリンズ道徳哲学』に近いものと推定されている¹⁴。『ポヴァルスキー実践哲学』の「人間性の使命 (*Die Bestimmung der Menschheit*)」と題された章 (XXVII 233) において、まずカントは、「*「個々の人間の使命」と「全人類の使命 (die Bestimmung des ganzen Menschlichen Geschlechts)*」とを区別する (XXVII 233)。「*「個々の人間」*は自己保存や自己

の幸福を目的とするのであるが、「*「人類の使命」*はこうした「*「個々の人間の使命に対抗する」*ことがある (ebd.)。そしてカントは、この「*「全人類として見た人間は、明らかに社会へと定められている」*ことを指摘する (XXVII 234)。市民的社会生活において人間は、人類社会の最大の完全性のために「*「すべての才能を発揮」*しうるように、まずは「*「訓練される (disciplinirt)*」べきものなのである (XXVII 234 f.)。しかし一方で、人間は市民社会において「*「抜け目なさ*と*「怜悯*とを駆使しなくてはならない」。このことは同時に、「*「贅沢さ」*への欲求や、「*「新たな害悪、中傷、名誉毀損」*などをも生じさせる (XXVII 234)。すなわち、市民社会では人間の内にある「*「すべての悪しき萌芽」*も同時に発展させられるのである (ebd.)。こうした事態に対してカントはここで、1770年代半ば以降の人間学講義においてと同様に、市民社会での「*「外面的」*道徳的強制」の効力を認める。人は、他者の「*「判断を通じて道徳性の制限の中に留まるように仕向け」*られると言える (XXVII 235)。

『コリンズ道徳哲学』においてカントは、「*「人類の最終的使命は人間の自由によって実現される限りでの道徳的完全性であり、このことによって人間は最大の幸福に与ることができる」と述べる (XXVII 470)。「自由へのこの能力によってたしかに人間はその他のすべての動物から区別されるのであるが、その反面、「もし自由が……制限されないとするならば、自由は存在しうるものの中でもっともおぞましいもの」となり、「粗暴な大規模の無秩序が現われてくる」と言う (XXVII 344)。*というのも人間は、「この[自由の]力を、自己並びに他者や全自然を破壊するのに使用」しないと限らないからである (ebd.)。そこでカントは、「人間の本性」の「脆弱性 (*Gebrechlichkeit*)」について説明する。「脆弱性とは……そこ[=人間の本性]において道徳的善性が不足しているということだけでなく、*「悪しき行為への最大の原理と動機が支配している」*ことを意味する (XXVII 293)。「*「道徳的完全性はたしかにわれわれの判断においては賛同を得るのであるが、……この動因は感性的動因ほど強力で駆り立てる力を有していない」* (ebd.)¹⁵。しかしカントは、「人間の魂が純粋な道徳性の一切の動因」を完全には失っているとは考えずに、「*「内面的善性の動因に基づいて行為」*しうる「*「道徳性」* (ebd.) の内に「*「人間性の尊厳」*を認め、人間の「*「自由」*の能力は、この「*「人間性の本質的目的」*であるところの「*「道徳性」*と合致しなくてはならないと主張する (XXVII 343 u. 345)¹⁶。

さらに、「*「人間性の尊厳」*の所在が「*「内面的善性」*に置かれることによって、次のような様々な「*「人間性の義務」*が導かれる。たとえば、「*「物件」*に対する行

為であっても、人間の「内面的」道徳性を毀損するものは許されない。そこで、「動物」に対する不必要な残酷な行為も「人間性の義務」に反するものとなる。そうした行為者の「無感覚さ」は人間、特に子供に対しても同様に向けられかねないからである（XXVII 459）。またカントは、「道徳的性格」が「学問」の条件にならなくてはならないと主張する。その限りにおいては、「誠実さ」や「他者と自己の人格の権利への尊敬」が「学問」を通して促進されるであろうが、逆にこの道徳的「性格を欠く人は、商人が自分の商品を扱うのと同じように、自分の悟性の産物[学問]を扱う」ようになると警告している（XXVII 462 f.）。

1770年代半ば頃のものと思われる道徳哲学講義における以上の叙述から、第一に、カントは「人間性」の内に悪しき側面と同時に善き側面を認めていることが分かる。すなわち、「人間性」はその「脆弱性」のゆえに、自由が制限されないとするならば様々な悪性を発揮してしまうことをカントは認める一方で、誰の内にも見出されうる「道徳性」が「人間性の尊厳」を根拠づけるものであるとし、この理念を人間の自由を制限すべきものとして位置づける。ここには「人間性」概念の二面性が叙述されている。第二に、それゆえ、この時期すでに人間を他の動物種と区別しうる「人間性の尊厳」は、その「道徳性」の内にあるということカントは主張していることが、また「人類の最終的使命」をその「道徳的完全性」に置いていることが分かる。しかし、この時期のカントは、「人間性の脆弱性」のために個別的には戦慄すべき状況が市民社会に起こることを認めているが、「個人」の目的に「社会」の目的が対抗することや、また「外面的」道徳的強制力が働くことによって、人類全体においては幸福な状態がそれはそれとして実現されうるものと想定していたのだと私は考える。また、道徳的完全性も市民社会の進展にともなって次第に促進されうるものと想定していたのだと思われる。

その点1780年代の人間学講義における、道徳化を先送りにしたまま市民社会の完成化を押し進めても、そのことだけでは人間の欲求の多様化・拡大化をもたらさず、人間の自由への欲求に歯止めを利かすことのできない事態を生じさせ、かえって市民社会そのものの瓦解をもたらしかねないとのカントの洞察は、重大な思想上の発展を示すものと言えよう。なぜなら、その洞察によって、カントはもはや外面的道徳的強制力に社会形成の原動力を認めることをやめ、そうした強制力と道徳性の次元を明確に区別するようになったからである。カントは「個人」の視点からだけでなく「社会」の視点に立ったこの洞察によって、「道徳性」が単に「技術・学問」や「礼儀正しさ・怜悯」と並立的に扱われ

べきものとしてではなく、むしろ後者二つのものがその下に開化されるべきものとして上位に位置するものであることを強調した。「道徳化」は、人類が市民的社會生活を通じて様々な善きものを発展させるためにも不可欠のものなのである。すなわち、利害関係に関わりなく「誠実」でありえるような「道徳的心術」を、「人類の性格」として形成することが最優先されなくてはならない。それが、ひいては市民社会の繁栄と進歩を支えるものになりえるのである。こうした「道徳的心術」はそれ自体としては、利害関係における結果からは独立に形成されねばならないのであるが、結果的には市民社会における具体的諸活動（たとえば言語活動）を支えて社会の進歩の支柱となりうるものと言えるのである。

カントはそれぞれの時期に¹⁷、人間存在を形成する「開化[文化]」、「文明化」、「道徳化」における様々な側面を指摘しながら、それら諸要素間の中で異なる力点を置いてきた。特に1780年代以降カントは、「個人」の視点から「社会」の視点に立った思索をさらに深めることによって、「文明化」の進歩にまつわる危機を強く意識するようになったと言える。こうした思想発展も、「人間性」を三つの要素の統合体と考える中で獲得されたカントの人間学的洞察に裏づけられたものなのである。

注

カントの著書、レフレクシオン、講義録からの引用は、すべてアカデミー版カント全集による。ローマ数字がその巻数を、アラビア数字がページ数を示す。人間学講義及び道徳哲学講義の年代設定に関しては、以下の文献が基礎になっている。Clemens Schwaiger, *Kategorische und andere Imperative. Zur Entwicklung von Kants praktischer Philosophie bis 1785*, Stuttgart-Bad Cannstatt 1999, bes. S. 105 ff., 110, 112, 150 f. u. 157. レフレクシオンのアディッケス (Erich Adickes) による年代設定は多くの問題を孕むものであるが、参考までに本文中に挿入して記す。尚、引用文の[]内は筆者による補充である。

- 1 この点に関しては次の文献を参照。Michael Oberhausen, *Das neue Apriori. Kants Lehre von einer 'ursprünglichen Erwerbung' apriorischer Vorstellungen*, Stuttgart-Bad Cannstatt 1997, S. 42; Schwaiger, *Kategorische und andere Imperative*, a.a.O. S. 21-23.
- 2 Norbert Hinske, *Zwischen Aufklärung und*

「人格の内なる人間性」 についてのカントの思想形成

- Vernunftkritik. Studien zum Kantschen Logikcorpus*, Stuttgart-Bad Cannstatt 1998, S. 20 u. 35 f.
- 3 Vgl. ebd. S. 17 f. S. a. Oberhausen, *Das neue Apriori*, a.a.O. S. 40; María Jesús Vázquez Lobeiras, *Die Logik und ihr Spiegelbild. Das Verhältnis von formaler und transzendentaler Logik in Kants philosophischer Entwicklung*, Frankfurt a.M., Bern, New York, Paris u. Wien 1998, S. 69-75.
- 4 注目すべき研究として、以下の文献を参照。Clemens Schwaiger, *Kategorische und andere Imperative. Zur Entwicklung von Kants praktischer Philosophie bis 1785*, Stuttgart-Bad Cannstatt 1999. また当著作に対する以下の書評も参照されたい。船木祝「クレームス・シュヴァイガー著『定言命法とその他の命法——1785年に至るまでのカント実践哲学の発展——』(カント研究会編現代カント研究10『理性への問い』晃洋書房、2007年)、187-196頁。
- 5 カントにおける「人間の尊厳」概念が、単なる「個々人の権利」の価値を示すものではなく、「人類全体……の中で実現される」べき、「人間性の価値」を表すものであるという指摘に関しては、以下の文献を参照。蔵田伸雄「人間の尊厳を守る責任——カントとヒト胚の議論——」(日本カント協会編日本カント研究5『カントと責任論』理想社、2004年)、特に8頁-13頁。
- 6 Alexander Gottlieb Baumgarten, *Metaphysica*, Halle 41757 (11739), § 749, S. 298 [wiederabgedruckt in: *Kant's Gesammelte Schriften*, Akad.-Ausg. Bd. XVII 143].
- 7 Alexander Gottlieb Baumgarten, *Ethica philosophica*, Halle, ³1763 (¹1740), Neudruck: Hildesheim 1969, § 403, S. 268 f. [wiederabgedruckt in: *Kant's Gesammelte Schriften*, Akad.-Ausg. Bd. XXVII 990].
- 8 Baumgarten, *Ethica philosophica*, a.a.O. § 425, S. 282 f. [XXVII 996].
- 9 『実用的見地における人間学 (*Anthropologie in pragmatischer Hinsicht*) (1798年) において、1780年代までに見られた思想の幾つかが、「人類の性格」と題された章において集大成される形で述べられている。第一に、「人類の特性」とは、「自然が、不和の萌芽をそれに植えつけて、人類自らの理性がこの不和から和合を……作り出すことを欲したということである」(VII 322)。カントは続けて、こうした「不和」が、「文化が進歩する
- ことによる人間の完成化」のための「手段」となっており、そして「人間は、……[他の]人間と社会を形成し、この社会において技術や学問を通じて自らを開化し、また文明化し、そして道徳化するように定められている」とする (VII 322 u. 324)。第二に、人間はこうした完成化を、他の一切の動物とは異なり、「個体」としてではなく、「多くの世代」を経た「進歩を通じて」「類」として実現しうるものとされる (VII 324)。
- 10 『実用的見地における人間学』においてもカントは、市民社会が完全性へ向かう進展の中で、「ややもすれば自己の意志はいつでも同胞に対する反感となって現われ、……他者に対する支配者であろうとする、無条件的自由への要求をしてくるのである」と指摘する (VII 327)。一方カントは、このような事態に至った原因を、人類が「道徳性から……その上に樹立されるような合目的な文化へと」向かうのではなく、「文化から道徳性へと」向かおうとしたことにある、と明確に述べている (VII 328)。
- 11 カントが1780年代以降、「怜悯」の概念を単なる「個人」の問題としてではなく、特に「人間との交わり」の中で考察したことから、カントにとり「幸福」概念が重大な困難に直面することになったという指摘に関しては、以下の文献を参照。Schwaiger, *Kategorische und andere Imperative*, a.a.O. S. 119-127 u. 184 ff.
- 12 カントにおける「部分的真理」の概念には、すべての人間の認識には一部の真理があるがゆえに、人間はお互いに意見を伝達し合うことによって初めて、真理の全体に到達しうるものであるという、「ドイツ啓蒙思想の根本思潮の一つ」が示されているということに関しては、以下の拙稿を参照。船木祝「認識の批判と拡張——カントにおける『仮象性』と『蓋然性』の区別——」(カント研究会編現代カント研究9『近代からの問いかけ——啓蒙と理性批判——』晃洋書房、2004年)、特に45頁以下及び注(18) 54頁。それゆえ「言語」活動そのものが歪められるとするなら、それは人類が真理全体に達することを阻むことになると言えよう。また、『実用的見地における人間学』においても、「言語」を使用することによって必ずしも人類が、「その他の……存在者の下で何ら名誉ある地位を占めるに値するものとはならない」とカントは言う (VII 332)。それはつまり、「人類においては誰もが、警戒してあるがままの自己を全部表してしまわない方が得策であると考える」がゆえに、人類のこうした「性質が、……うわべを

装うことから故意の欺瞞 (Täuschung) へ、ついには虚偽 (Lüge) にまで進行」せざるをえないからである (ebd.)。一方当講義録でははっきりと、人類が他の動物種に対して何ら優越した地位を獲得しないのは、人類に「道徳的素質」を認めない場合だとされている。この素質はむしろ、虚偽に傾く「性癖に対抗して、……もろもろの障害を受けつつも努力向上」すべきであるという「理性の生得的要求」を示しているのである (VII 333)。そして、「人間は、生得的な素質上 (天性) 善である」ことを認めるべきだとするこの要求は、個々の「人格」に対してのみならず、「社会」に対しても発せられるものなのである (VII 324; vgl. VII 333)。それは一つには、その認識においてこそ人類に、社会の中で利害関係を離れて「徳」を究極目的として志向しようような次元が切り開かれるからなのであり、もう一つには、その認識がそもそも、市民的社会体制の下で人類が幸福を実現するための具体的礎ともなっているからなのである。

- 13 『一般史の理念』においてカントが描写している「アンタゴニズム」は、「自然の合目的性」であるのであるが、同時に「道徳的目的論に役立つ」ものとなっている、という見解に関しては、以下の文献を参照。菅沢龍文「人類の進歩と歴史物語——カントの批判的歴史哲学——」(カント研究会編現代カント研究9『近代からの問いかけ——啓蒙と理性批判——』[前掲書])、特に141頁以下。
- 14 シュヴァイガーによれば、『コリンズ道徳哲学』には『ポヴァルスキー実践哲学』よりも若干の思想上の進展が見られるという。たとえば、前者においては、カントのいわゆる命法の3分法の記述がある。しかし、明らかに『ポヴァルスキー実践哲学』は『人倫の形而上学の基礎づけ』に比べると思想上まだ未熟である。そこで、シュヴァイガーは、『ポヴァルスキー実践哲学』を『コリンズ道徳哲学』の方に近い時期の講義であると推測する。Vgl. Schwaiger, *Kategorische und andere Imperative*, a.a.O. S. 150 f.
- 15 Vgl. *Praktische Philosophie Powalski* XXVII 193.
- 16 Vgl. *Praktische Philosophie Powalski* XXVII 215.
- 17 『理論では正しいかもしれないが、実践には役に立たないという通説について (Über den Gemeinspruch: Das mag in der Theorie richtig sein, taugt aber nicht für die Praxis)』(1793年)においてカントは、「義務を遵守することによっ

て実現できるかもしれないような戦利品としての甚だしい利益の重荷から、徳を完全に解除して、徳を完全な純粋性において思い描く」ことの重要性を強調する (VIII 288)。ここでは、市民社会で利益を得るために、すなわち「名誉、交際、職務」を獲得するために「誠実」であろうとするような「外面的」道徳的強制とははっきりと区別された「徳」自体が、「人間性」の究極目的として設定されるべきであるということが説かれている。また『万物の終わり (Das Ende aller Dinge)』(1794年)においてカントは、「究極目的に向かう不断の進行」において善に向かう道徳的「心術」の確立の必要性を説く (VIII 334)。「道徳的心術」は「時間における」いかなる「現象」の変化にも左右されることのない、「善に向かわんとする」「恒常不変」姿勢を示すものだと言える (ebd.)。以上のように、1790年代カントは、「徳」そのものが人類の存在の究極目的であることを認識することによって、「時間の推移には支配されることのない」(ebd.) ような「道徳的心術」の確立を最優先しなくてはならない、と強調していることが分かる。